

## ペルーアマゾン、アヤワスカツアーをめぐる —観光化、商品化されるシャーマニズム—

山 本 誠

ペルーやエクアドル、コロンビア、ブラジルなどアマゾン上流域の先住民社会では、数千年前からアヤワスカと呼ばれる幻覚性植物が使われてきた。そのアヤワスカを使用するシャーマニクな儀礼が近年観光の対象になり、とりわけペルーのイキトスやプカルパでは多くの外国人旅行者を集めている。

この論考では、まずプカルパ近郊のサンフランシスコ村の状況、およびこの種のアヤワスカ儀礼に参加した旅行者たちの経験を紹介する。身体観、自然観が根本的に異なるなかでの外国人旅行者とシャーマンの交感的コミュニケーション、そのありようは興味深い。とはいえ観光化、商品化にともなう問題もみのがせない。シャーマンの質の劣化や地元住民が排除されていく可能性も無視できないし、一方でアヤワスカは現地では「聖なる植物/液体」だが、同時に国際条約において所持・使用が禁止されているDMTを含む「薬物」でもある。その意味で、後半はこういったデリケートな現実を評価する上での前提として、アヤワスカ儀礼を含めたアマゾン先住民の文化変容の歴史、また近年の世界の動向に注目した。

キーワード：ペルーアマゾン、アヤワスカ、観光、商品化、薬物規制

### 【アヤワスカツアーへの関心】

2011年の夏、私は久々にペルーを訪れた。1990年代の初頭に2回、都合3ヶ月ほど滞在して以来の訪問である。当時のペルーはセンデロ・ルミノソに代表される左翼ゲリラと体制側の治安部隊双方による暴力の嵐が吹き荒れ、経済活動も沈滞して社会全体に殺伐とした空気が漂っていた。あれから20年、私も歳をとったが、ペルーも大きな変化をとげていた。ゲリラ勢力は影響力を失い、治安が回復した首都リマの繁華街はビジネスエリートや観光客で賑わい、華やぎと活気を取り戻しているようにみえた。実際、様々な経済指標に示されているように、近年のペルーは中国にひけをとらない経済成長ぶりを発揮しているようだ<sup>1)</sup>。

治安が回復し、経済が安定すれば外国からの旅行者も増加の一途をたどる。当然ながらイキトスやプカルパ、マヌー国立公園など、アマゾン地域での各種エコツアーも活況を呈していることだろう。そう考えた私はプカルパに向かった。ただし、私自身の関心は野生動物との遭遇を期待しながら熱帯雨林を歩くような通常のエコツアーにはなかった。プカルパを選択した理由は、(イキトスとともに)かの地ではアヤワスカを軸に展開されるシャーマニクな治療儀礼に外国人旅行者が数多く参加しているという情報を得ていたからである。

アヤワスカ (Ayahuasca) とは、アマゾンの森に自生するキントラノオ科 (*Malpighiaceae*) の蔓植物 (*Banisteriopsis caapi*) であり、これにアカネ科 (*Rubiaceae*) のチャクルーナ (*Psychotria viridis*) の葉を加え、数時間煮つめた混合液の名称でもある。薬理的には「幻覚剤」(hallucinogen) に分類される物質だが、ペルーやエクアドル、コロンビア、ブラジルの一部など、アマゾン上流域の先住民社会では数千年の長きにわたって使用されてきた「聖なる」植物であり液体である<sup>2)</sup>。

先住民たちはアヤワスカのもたらす特殊な意識状態のもとで「異なる現実」に参入し、祖先の霊や動植物の精霊など、多種多様な超自然的存在との交流を重ねていく。シャーマンと呼ばれる存在であれば、その中で各種の力や知識を受け取り、その成果を共同体の仲間に還元することが期待される。集落をあげて行う魚毒漁の決行日を占い、人間関係、男女関係のもつれを解きほぐし、大切な捜し物のありかかビジョンの中に求める。様々な領域における調停役を担うシャーマンだが、多くの場合その中心は心身の不調の調停、私たちのカテゴリーからすると精神的・身体的「治療」ということになる。

そのシャーマンの治療儀礼（以下、「アヤワスカ儀礼」と表記。また「アヤワスカ」は以下混合液の方をさす）に旅行者たちが参加しているという。そこでは何が起きているのだろうか。儀礼に参加する旅行者たちの動機はどういうもので、またそこから何を得ているのだろうか。シャーマンたちの素性や現地コミュニティに与えているであろう影響も気になるし、文化の混雑や流用にとまなう複雑な現実がみてとれそうでもある。

\*                     \*                     \*

空路プカルパに入った私は、ヤリナコーチャ湖畔に位置するアマゾン先住民シピボ (shipibo) の集落「サンフランシスコ村」で数人のシャーマン<sup>3)</sup> から話を聞き、旅行者と儀礼に関する会話を交わし、私自身も儀礼に参加してみた。以下、イキトス周辺に関する資料や旅行者のブログなども参照しながら、その一端を紹介してみよう。

### 【サンフランシスコ村への訪問】

写真1を見ていただきたい。サンフランシスコ村で旅行者を集めているシャーマン、マテオ氏の自宅前である。アマゾン先住民の村にありながら、スペイン語のほか英語、そして日本語

〈写真1〉



で「ようこそ」と書かれている。もちろん、「アヤワスカ儀礼にようこそ」という意味である。儀礼そのものが観光の対象として商品化されていること、しかもクライアント（「顧客」というべきか）として想定されているのがスペイン語話者だけでなく日本人や英語になじみのある外国人旅行者だということが一目瞭然だ。確かに、この集落はプカルパの街からバイクタクシー (motocarro) で十数分、さらにヤリナコーチャ湖の船着き場からカ

車で1時間余りという、それなりに交通の便のよい、それでいて周囲は熱帯雨林と湖に囲まれた、外国人にとって手軽に「アマゾン」を実感できる場所といえる。特殊なビザが必要なおえに軍の許可がなければセスナに乗れず、先住民組織の紹介状がなければセスナから降りて集落に入ることが許されない——かつて私がエクアドル・アマゾンで味わった煩わしさなど皆無の、旅行者にとって都合のいい先住民の村であろう。

訪問した当日（2011年8月26日）、マテオ氏本人は不在だったため、弟子にあたる人物に話を聞いてみた。アヤワスカ儀礼に参加したい旨を告げると、参加費は1回100ソル（リマで両替した1ドル=2.72ソルのレートで換算すると37ドル弱）、また宿泊する場合は食事込みで「追加料金50ソル」ということであった。儀礼に参加して宿泊すれば55ドル、ヤリナコーチャ湖周辺にあるプールつき3つ星ホテルに2泊できる金額だ。マテオ氏のもとで心身を浄化しているという長期滞在の旅行者も見かけたが、やはりというべきか、アイルランドから来た30歳前後の白人男性だった。

マテオ宅の近所に暮らすロヘル氏という別のシャーマンからも話を聞いてみると、やはりアヤワスカ儀礼の参加費は100ソル、ただ宿泊は25ソルとのことだった。ロヘル氏の場合、村から歩いて30分程度の森の中に「スイピーノ」と称する宿泊と儀礼のための空間を所有しており、昨夜もそこで儀礼を行ったばかりだという。参加者は15人、国籍は多様で日本人も5,6人いたそうだ。合計で1500ソル、比較的旅行者の多い8月下旬という時期を考えると、宿泊費を加えると一夜にして700ドル近い収入になる。周囲の村人との経済的格差は相当なものだろう。確かに、会話を交わした部屋の一角には、コンサートホールでしか見られないような超大型のスピーカーがいくつも据えられていた。こうした格差が集落内に有形無形の軋轢を生じさせているのか、それなりの再分配もなされているのか（あるいはその両方か）、気になるところである。

ロヘル氏からはアヤワスカはドラッグ（droga）ではなく薬（medicina）であること、ドラッグ中毒に陥った人たち（adictos）もアヤワスカで治療できるし、実際に自分もやっている、またシャーマンになりたいという弟子も受け入れていて、スイピーノには日本人の弟子が二人暮らしている、といった興味深い話を聞くことができた。しかもたんなる「見習い」というレベルではなく、すでにアヤワスカ儀礼を取り仕切ることもあるなど、半ば独り立ちしているという。

実際にスイピーノを訪れてみると、残念ながら修行中の二人に会うことはできなかったが、いかにも長期旅行者風の日本人カップルがくつろいでいたり（「インドに住んでいる」とのことであった）、修行僧を思わせる痩せ方をした中年の白人男性が上半身裸で歩いていたりといった具合で、いってみれば冷凍保存されていた半世紀前のカウンターカルチャーが自然解凍されたような、なんとも不思議な空間であった。とはいえ、その気にな

〈写真2 スイピーノで洗濯中の旅行者〉



れば対岸にあるプールつきホテルに宿泊する程度の経済力がなければ、スイピーノに1泊することもできない。やはり、ここもまた「豊かな〈北〉の旅行者たちが集う、グローバル化時代の観光地」だということなのだろう<sup>4)</sup>。

### 【アヤワスカ儀礼とは】

アヤワスカ儀礼の参加者には事前に食事制限 (dieta) が課せられる。私自身も複数のシャーマンから塩と砂糖、トウガラシ、脂肪、アルコール飲料、さらに牛肉や豚肉、とくに豚肉を避けるように言われ、かまわないのは野菜サラダやフルーツ、米、魚、鶏肉あたりだという指示を受けた。さらに儀礼の当日は午後2時～3時以降は何も口にはいけないという。こういう食事制限の意味あいについて詳しい説明は受けなかったが、これは日本でいう食べ合わせ、たとえば「ウナギと梅干しを一緒に食べてはいけない」といったシンボリックな規範にとどまるものではない。

アヤワスカにはハルミンやハルマリンなど、ベータ・カルボリンと総称される化学物質が含まれるため、それらと相互作用しかねない成分を含む食物は禁忌にあたる。イキトスで長年調査を重ねてきた人類学者ドブキン・デ・リオスによれば、発酵食品や保存加工された食品、とくに燻製肉や塩漬け肉は危険で、大豆製品でも副作用を起こす可能性があるという。タンパク質を含む飲食物を常温で摂取するのも避けるべきだし、具体的な食品名をあげれば、ザワークラウト、牛肉、チーズ、生ビール、ワインなども問題含みであるらしい (Dobkin de Rios and Rumrill, 2008:7-8)。また私自身は質問されなかったが、抗うつ剤や抗不安薬を使っていた場合、アヤワスカを飲んだ際に脳内の神経伝達物質セロトニンが過剰な状態になり、後でひどい抑うつ状態に陥る可能性がある。付け加えれば、塩や砂糖、トウガラシ、脂肪を抜いた食事、摂取前の断食はセロトニンの量を (自然な形で) 上昇させ、アヤワスカ摂取時の嘔吐と下痢を最小限にする効果もあるようだ (op.cit., 2008:8)。

儀礼そのものはビジョンが鮮明になる夜を待って開始される。時刻でいえば夜8時～9時くらいだろうか。場所はシャーマンの自宅だったり、スイピーノのようにアヤワスカ儀礼用の特別な空間で行われたり、様々である。自宅といっても、サンフランシスコ村のような先住民の集落内にあるとは限らない。とりわけイキトスの場合なら、車の通る音が聞こえる街の中ということもある。

儀礼自体はシンプルで、複雑な式次第があるわけではない。形式の細部についてはシャーマンごとの違いもそれなりに存在するが、基本のスタイルは大同小異である。ロウソク程度の明るさのもと、シャーマンが参加者に「どういう問題を抱えているのか」「何を解決してほしいのか」簡単に質問し (事前に行われていることも多い)、アヤワスカをタバコ (mapacho) の煙、口笛で淨めた後、参加者に渡していく。分量はアヤワスカの濃さ (煮つめ方) によるし、チャクルーナ以外に何を加えているかにもよるが、30～40cc程度だろうか<sup>5)</sup>。参加者がリラックスできるように、床にはそれぞれマットが敷かれ、あらかじめ嘔吐用のバケツが置かれていたりもする。

シャーマン自身を含めて参加者全員がアヤワスカを飲み終わると、ロウソクも消されて暗闇

となる。それぞれがそれぞれの世界に入って行くわけだ。ほどなくしてシャーマンの歌が響いてくる。師匠のシャーマン、もしくは精霊から直接伝えられたもので、ペルーでは「イカロ」(icaro)と呼ばれる。もちろん、イカロはただのBGM的な歌として聴かれるわけではない。治療としてのイカロ、精霊を呼ぶイカロ、敵のシャーマンの攻撃から身を守るためのイカロ、否定的なエネルギーを除去するためのイカロなど、様々なイカロが存在するが (Fotiou,2010:190)、幻覚剤摂取時の被暗示性の高まりは催眠状態にも匹敵するという (Dobkin de Rios,2009:102)。当然、素面の状態で聴く時とは比較にならない説得力をもつはずだ。しかし、多くの参加者はイカロの歌詞を理解しながら聴いているのではない。ということは、意味作用を欠いた純粹な音の連なり、その音色やメロディやリズムこそが参加者の心身に沁みていく、「リズムとメロディがビジョンの流れを方向づけたり調整したりして参加者をサポートし」、アヤワスカの効果が強すぎたりして混乱状態に陥った時は「精神的、スピリチュアルな錨としてはたらく」ということである (Tupper,2009b:276)。

儀礼の最中には嘔吐する参加者、腹を下してトイレに駆け込む参加者もでてくる。というよりそれが普通である。嘔吐にせよ下痢にせよ、それは心身の浄化のあらわれであり、邪悪なものを排出した後でこそ、より深い経験が可能になり、本格的な教えがもたらされるとされる<sup>6)</sup>。

嘔吐が激しすぎたり、参加者自身が精神的に危機的な状況に陥るなど、なんらかのトラブルが発生すればシャーマンが個別に対応する。参加者の側からアドバイスなどを求められた場合も同様である。とくにそのようなことがなければ、基本的に各自が各自の世界に浸ったまま、時間が流れていく。

儀礼が終わるのはアヤワスカの薬理作用が切れる4～5時間後というところか。ゆるやかに日常の意識状態にもどるだけの話で、儀礼の終了に際して定まった形式は存在しない。参加者の立場からすれば、食事制限を行い、夕食を抜いた状態で仲間と一緒にアヤワスカを飲み、暗闇の中でシャーマンの歌うイカロを聴く——煎じ詰めれば、アヤワスカ儀礼とはこのようなものだ。「儀礼」(ritual/ceremonia de ayahuasca)と呼ばれているとはいえ、参加者全員に対して共通の知識を授けたり一定の方向に経験を水路づけていくことはない。したがってロウソクを消した後の経験は参加者ごとにまったく異なる。きわめて深い経験をしている参加者のすぐ隣で、ろくにビジョンも見えず、退屈な想いをしている者がいたりする。ゲームは同一性から差異に向かっていくが、儀礼は逆に差異から同一性に向かう(ゲームに参加する時点で参加者は平等、同一性の相にあるが、終了する時点で勝敗なり点数差なりの差異が生じる。その一方、儀礼はバラバラだった参加者を束ねて統合していく)——よく知られたレヴィ＝ストロースの指摘だが、その意味でいえば、この(旅行者相手の)アヤワスカ儀礼なるものは「儀礼」というよりむしろ「ゲーム」に近いのかもしれない。

### 【儀礼参加者の経験①】

アヤワスカのもたらす精神作用は強烈である。当人のもつ潜在的な感受性が全方向に開かれた状態といってよい。その眩暈めまいの時においては、何も起こらないことも含めて、何でも起こりうる<sup>7)</sup>。心身の浄化、苦しみ(illness)の軽減・除去、あるいは自己変革——めざすべき方向

性の大枠は存在するものの、その結果は何ら約束されたものではない。幻覚剤の経験は薬理作用そのものというより、どのような期待感をもって（セット）、誰と、どのような環境のもとで（セッティング）摂取するか、そういった内外の環境によって左右される面が大きい。とはいえ、それだけで決定されるわけでもない。たとえばシャーマンの息子が親の後を継ぐべくアヤワスカを飲み始めても、そのビジョンの恐怖から修行を放棄することがある。「あんな怖いものは見たくないんだ、親父はエライと思うけど、オレはイヤだ」とは私自身、調査という名目でお世話になっていたエクアドルのアマゾン先住民カネロス・キチュア（Canelos Quichua）の村でシャーマンの息子本人から聞いた話である。全面的な社会的・文化的承認を背景に、尊敬するシャーマンである父親と一緒に、という最高のセットとセッティングのもとですら、そのようなことが起こる。実際、インターネット上には地獄の苦しみから天上的な愉悦まで、深く刻まれたに違いないトラウマの経験から生涯忘れられないであろう至福の経験まで、ありとあらゆる「アヤワスカツアー体験記」があふれてもいる<sup>8)</sup>。またその語り口にしても、自文化の宗教伝統によりそうもの、心理学や精神分析、精神医学や薬理学などアカデミズムによりそうもの、個人の浄化、ヒーリングを人類なり地球なりのヒーリングに重ねようとするニューエイジ的なもの、チャクラやクンダリーニといったインド的、ヨガ的なもの、そしてアマゾンの精霊、アニミズム信仰といった多種多様な発想なりジャーゴンなりが（ひとりの体験談の中にすら）混じり合っている。

その意味では、参加者たちの経験について、何をどのように語っても恣意のそしりは免れ得ない<sup>9)</sup>。ただ、その多様な経験の中で興味深く感じたのは、私たちの社会において正統とされている自然科学的な身体観、自然観とはまったく異なっているにもかかわらず、シャーマンの介入がそれなりに効果を発揮しているように見えたり、参加者の経験の中にシャーマニズムの原初的な姿ともいえるものが含まれていたことだ。

たとえば、プカルパでアヤワスカ儀礼に参加した日本人女性（2006年12月、当時24歳）はブログの一節に次のように記している（以下、「・・・」は引用者による中略を、「/」は原文での改行を示す。また個人名はイニシャルとした）。

・・・ああ、これを飲んだら吐くのね、と恐怖心を抱きつつも、「私の中の悪いものがでできますように」と念じて飲んだ・・・

（1度吐いた後「パニック」になり）私大丈夫なわけ？もしかして死ぬとか！？など、そういうネガティブな考えがうかんできて、恐怖を感じた・・・吐きそうになってオェオェなっている時に後ろを見るとマエストロがいてチュパっていた。チュパとは、マエストロが患者の頭とか体の悪いところに口をあてて、吸うというもの。で、吐き気が治まったから部屋に戻ると、またマエストロがチュパってくる・・・吐いたのかはおぼえていないけど、朝起きてみたら、吐いたものがあつたので、多分吐いたんだと思う。で、ずーとチュパってもらっていると、気分がおちついてきて、さっきまですごくクラクラしていたのに、それもなくなり正常な状態に戻ったみたいだった・・・

今回、パニックになったことで、やっぱりマエストロは信頼できる人でないとこわいなー

と思った。もし、マエストロがちゃんとしていなくて、どっか意識がいてもどってこれなかったら本当にこわい。興味本位とかで飲むべきではなかったのかもしれない・・・

(<http://mysoulmyheart.com/note/ayahuasuca3.html>)

気功関係の団体旅行参加者、Y.N氏の経験も紹介しておく（2005年、年齢・性別不明）。

・・・ペルーにいったから3、4日してから皆の話を聞いて、どうやらアヤワスカはすごいらしいということに気がついてきました・・・今の自分に問題になっている根っこの部分の原因、10才の時の出来事がうかんできました。/その時の事が細かく再現され、長い時間涙がでました。その間何度もシャーマンがきてくれて悲しみや苦しさを吸い取ってくれて/また内側から湧くものを一枚一枚はがすように繰り返し繰り返し・・・

どのくらいくりかえしたのか、またシャーマンが来てくれたとき、/そっと私の背中に手をあて・・・体の内側からとろけるようなやすらぎと幸せがあふれてきました。/・・・そして内側から感謝の気持ちが湧き出てきて、/全てのものに、存在に皆皆にありがとうの気持ちがとまらなくてできました。

・・・アヤワスカのあとは周りの景色が一段と鮮やかに写り、/食べ物も更においしく感じ、なんだか目の輝きも増した気がしました。

([www5c.biglobe.ne.jp/~angel.../TSUA-Peru-Taikenk11.htm...](http://www5c.biglobe.ne.jp/~angel.../TSUA-Peru-Taikenk11.htm...))

ごく簡単な紹介にとどめたが、シャーマンの存在が大きな意味をもっていることがわかるだろう。Y.N氏のように抑圧していた過去のトラウマがでてきたりすれば、シャーマンの力量だけで結末は大きく異なってくることも予想できる。「やっぱりマエストロは信頼できる人でないとこわいなー」とはそのとおりであろう。

なお、ここで「チュパ」とか「吸い取ってくれて」と表現されているのは、アマゾン上流域のシャーマニズムではおなじみの「吸い出し」(chupada)という技法かと思われる。私にとってなじみ深いカネロス・キチュアの文脈では、吸い出しは敵のシャーマンから放たれた呪矢(chonta)を取り出すための処方であった<sup>10)</sup>。もとよりカリブ海の西インド諸島からパタゴニア(南緯40度以南)のフエゴ島まで、中南米全般で心身の不調(illness)は身体への呪物の侵入として捉える発想が広くみられる。「吸い出し」とはそういった病因論、大きくいえば身体観、自然観にもとづく行為である。またそういった論理を共有していればこそ、シャーマンのパフォーマンスも意味をもち、その意味作用が(幻覚剤を摂取していれば、圧倒的な説得力をもって)患者の心と身体をよき方向に変容させていく、そういうストーリーも想定できる。

確認するまでもなく、私たちはそのような世界を共有していない。少なくとも正統なものとはしていない。また「呪矢」ではなく「悲しみや苦しき」のような「感情」を吸い出すことについても、少なくとも私の知るアマゾン先住民の文脈ではイレギュラーな行為にみえる。にもかかわらず、Y.N氏のような体験談は例外的なものではない。参加者の側もシャーマンの側も、融通無碍といえれば融通無碍である。もちろん、儀礼の参加者にとって病因論なり身体観な

りの違いなど、それ自体はどうでもいいことだ。自分が抱えている問題が解決されたり洞察を得ることができればそれでいいし、とりわけ「患者」というスタンスで参加した旅行者にとっては、自らの苦しみは除去、もしくは軽減されるかどうか、それがすべてだろう。

いや、むしろ病因論や身体観の共有など、必要がないどころか邪魔なだけなのかもしれない。多くの旅行者にとって、アマゾンの森に暮らすシャーマンという存在は他者性の極み、まさにロマンを投影する対象として絶好のものだ。下手に共有なんかすればロマンの対象としての魅力が半減してしまいかねない。あのイエスも（他者性を感じてくれない）故郷のナザレでは癒しの力を発揮できていないし（マタイによる福音書13.54-58）、奇跡の治癒で世界的に有名なルルドの泉にしても、周辺地域に暮らす人に奇跡が生じた例はないという<sup>11)</sup>。

つながっているようでつながっていない。というより、「つながらないはずなのにつながっている」というべきか。簡単には語れないし、エッセンスは謎のままだが、なかなか思考喚起的な現実が展開されていることは確かである。

## 【参加者の経験②】

ネットで閲覧できる欧米人と日本人のアヤワスカ体験記を比較すると、スペイン語に関する運用能力の差からくるものか、儀礼に参加するにあたって欧米人の方がシャープに自分の問題をしぼりこんでおり、日本人のそれの方がややナイーブな印象を受けた。2003年から05年にかけてイキトスで長期調査を行ったフォティウの研究にも示されているように、欧米からの旅行者の多くはアヤワスカ儀礼をサクラメント、つまり聖餐にあたる儀式として捉え、エゴと高次のセルフを区別し、内なるセルフ（inner self）をみだし、エゴの溶解から根源的な自己変革に向かおうとする（Fotiou,2010:133-134）——確かに、ネット情報をチェックしても、そういったタイプの探求者は欧米人の方に多い気がした。

しかし、実を言うと、その種のニューエイジ的な「宗教の心理学化」にもとづく姿勢は私にとって既視感が強く、さほど発見的に思えなかったのも事実である（実態の描写として記述しておく意義は当然あるわけだが、どこかカウンターカルチャーの焼き直しに思え、あらためて紹介する気になれないのが正直なところである）。むしろ、事前に知識なり先入観なりを比較的同時に儀礼にのぞんでいる日本人旅行者の記述/経験の方にひかれるものがあった。もうひとつだけ、先のスイピーノでの儀礼に参加した日本人女性（2011年2月、当時22歳）によるものを紹介しておきたい。

彼女は2夜連続してアヤワスカ儀礼に参加している。まず1日目は「アヤワスカを飲む前に、見たいもののイメージトレーニングを」と言われたことから、「生と死の意味を知りたい」という前提で儀礼にのぞんだという。ビジョンの経験として、幾何学模様が回転しはじめた後—

・・・しかし、ふと、気が付いた。/私が・・・私の口が・・・私の知らない歌を歌っている！！/驚いた。/何が起きているんだ。/理性は、意識は、こんなにもはっきりしているのに！/なんだ、その歌は、何を歌っているんだ！（ここで彼女はパニックになり、さらに泣き叫んでいる自分を上から眺めている、といった経験を経た後）・・・

・・・目の前には、幾何学模様や緑色の閃光が、眩しいくらいに鮮明に見えている。/暗闇の中、シャーマンが私の前に来たようだった。/彼は私の頭を抱え、歌い、お香の匂いのする息を、私の頭に吹きかけた。/私は泣き止んだ。/なぜか心が落ち着いたのだ。

この時点では、シャーマンの介入が効果をあげているようにみえる。「頭を抱え」「息を・・・頭に吹きかけ」る技法は「吹き込み」(soplo/soplada)と呼ばれ、「吸い出し」と同様、アマゾン上流域のシャーマニズムにおける基本的な「治療法」である。カネロス・キチュアでも、吹き込まれる息にはシャーマンのもつ霊的な力がこめられており、その息/霊力を吹き込むことで患者の活力を取り戻そうとするのだとされていた<sup>12)</sup>。

ところがその後、彼女は「たくさんの白い人間たち」のビジョンの中で「小学生の頃住んでいたマンションから飛び降り自殺をした人/高校生の頃に死んでしまったおじいちゃん/私の店で飲んだ後に轢き逃げされた、馴染みのお客さん/3年前に自殺した幼馴染」といった「私の周りで死んでいった人たち」に出会う。その「幼馴染」と会話を交わしているうちに――

・・・周りで傍観していたはずの白い人間達が、一斉に私に話しかけ始めた。・・・/頭が痛い。耳が痛い。/全身が痺れ始め、身動きが取れなくなった。/そして、床に吸い込まれて落ちていくような感覚に襲われた。/「・・・お、落ちる・・・!」/右手を必死に動かし、すがり付ける何かを探した。/その手を、すぐに（一緒に参加した日本人旅行者の）Sが握ってくれた。「いるよ!!!生きてるよ!!!!」/そう言ってくれた彼の声で、はっと、我に返った。/一瞬、シラフに戻る。/シャーマンが、私の頭に何かを吹きかけている。/しかし、また、落ちていった。/そして、また戻ってくる。/落ちて、死者と喋り、/また戻り、まだ生きていることを確認する。/その繰り返しだった。/その間中、私はずっと歌を歌った。/死者と話している時は、どうやら、日本語じゃない言葉も使っていた。/理性の私でさえ、理解不能な言葉を喋っていた。/時には、その死者が死んだ時の景色だろうか・・・/それが、見える時もあった。/武士のような風貌の男と喋っている時は、/急に、自分が馬に乗っているような感覚に襲われた。/そして、目の前に大きな石が振ってきて・・・生き埋めになる。/口の中にどンドン砂が入ってくる感覚まであった・・・

どのように解釈するかはともあれ、非常に深い経験をしていることがわかる。メカニズムは不明だが、自然発生的な異言（[xeno]glossolalia）まで生じていることも興味深い<sup>13)</sup>。

しかし、話はこれで終わりではない。翌日、彼女はもう一度アヤワスカ儀礼に参加する。その動機は本人の表現では「楽しいビジョンが見たい、という挑戦心」「今度は何が起こるのだろう、という好奇心」「『発狂する』ということへの、単純な興味」「そして、怖いもの見たさ」であった。

前夜と同じく「緑色の閃光や、白黒の幾何学模様」のビジョンの後、海の中で「たくさんの魚と共に、優雅に泳ぐ経験を得る。問題ない。ところが、ふと気がつく」「また、昨日と同じ、あの気味の悪い歌を、また私は歌っている」状況に。

シャーマン同士が、何事かをひそひそと喋っていた。/そして、歌いだした。/「…なんだ？  
/一体何が起きている？/魚がいきなり、私の中に飛び込んで来た。/「あああ！！」/  
/叫ぶ。/しかし、次の瞬間には、また別の動物が見えていた。/牛、豚、鳥、狐や爬虫類、  
/ゾウや鹿、虎、果てはドラゴンのような奇妙な生物まで・・次々と、私目掛けて、飛び  
/込んでくる！！！！/「アアア——————！！！！！！」・・

気付けば四つん這いの体勢になっていた。/自分の身に、何が起きているのか、もう薄々  
/感付いていたことになる・・指から長い爪が生えてくる感覚があった。/酷い頭痛がして、  
/角が生える感覚。/全身の毛が、逆立つ気配。/爪でガリガリと床を引っ掻き、/右足は地面  
/を何度も蹴り、それはまるで、今にも突進していくような、獣の姿だった。/「ギギギギ  
/ギギギギ・・・！！」/唸った。/殺意が湧き上がってきていた。/シャーマンへの、殺意。

あいつの喉元を食い千切り、血に染めてやる。/一方で、理性が必死にそれを食い止め  
/ていた・・・思うように声が出ない。/殺したい殺したい殺したい！！！！/やめろ、やめろ  
/やめろやめろ！！！！/シャーマンは、まるで私を操るかのように、歌を歌う。/その歌を  
/聴くと、全く動けなくなるのだ。/しかし、シャーマンが歌うのをちょっと休めた、その  
/瞬間。/一瞬、意識がブツ飛んだ。/私は、唸り声を上げ、シャーマンに向かって飛び掛ろ  
/うと大きく跳ね上がった、のだと思う。/しかし、それを上から押さえつけてくれたのが、  
/隣にいたSだった。/はっと気付くと、体が少し軽くなっていた。

「シャーマンはジャガーに姿を変えることができる」、「ジャガーは偉大なシャーマンの化身  
/である」とはアマゾンでよく耳にする話である。そういった想像力が湧出する源泉にあたるよ  
/うな経験なのだろうか（当人は「憑依現象」と表現している）。何にせよ、すさまじい状況で  
/ある。また「シャーマンへの殺意」というあたりは、アマゾン上流域のシャーマンたちであれば、  
/ほぼ確実に「スイピーノのシャーマンを快く思っていないシャーマンからの呪術的攻撃」だと  
/解釈するだろう。もちろん、彼女の自由意思とは無関係に、彼女自身が一種の呪矢として操ら  
/れている、特殊な感受性が利用されているということだ。少し入り込めばすぐに気がつくこと  
/だが、アマゾンの先住民社会におけるシャーマニズムとは、実はこうしたブラックマジックに  
/充ち満ちた世界である。たとえばある少女が毒蛇に咬まれて亡くなったとする。父親は娘の死  
/に呪術が関係しているのではないかとの疑念を抱き、自分でアヤワスカを飲むなり、シャーマン  
/に依頼して「呪術としての毒蛇」を放ったのは誰かビジョンの中で探る。その中で犯人（や犯  
/人が依頼したシャーマン）が特定されると、カウンターマジックを依頼する、場合によっては  
/父親自ら散弾銃を片手に犯人の家に向かう、という風なことが起こりうる（もちろん犯人が依  
/頼したシャーマンも攻撃の対象になりうる）。

おそらく、こうした事情が観光化、商品化されたアヤワスカ儀礼の中で語られるのは稀であ  
/ろう。彼女のブログを読むかぎり、本人としてもまったくの想定外の事態だったようにみえる。  
/仮に語られていたとしても、彼女の経験がどうなったかはわからない。ともあれ、事態はさら  
/に進行していく。彼女を押さえつけたSにも憑依現象が伝染していくのだ。

Sが唸り声を上げ始める。/手が、どんどんおかしな形に固まっていく。/獣のような体勢になっていった。/しかしながらも、こちらの状況も尋常ではない…シャーマンが近寄って来て、私の頭を抱え込む。/そして、スーッと、何かを吹き付けられた。/体が溶けて、地面に吸い込まれていく感覚。/そして、シャーマンが、私の頭から、なにかを口で吸い取っていった。/「……………」/一瞬、正気が戻ってきた。

さらに、この後Sと彼女は「意識が吹き飛ぶ寸前」までいながら、憑依の実体たる「白い球体」をやりとりできるようになっていく。

「…………こいつ、貰うよ!!!」/Sの腕を掴み、喚いた。/理性の私は、驚いていた。/そんなことが、まさか、出来るっていうの? /Sの体内で暴れ回っている何か——それは白い球体に見えるのだが——に、意識を集中させる。/そして次の瞬間に、思いっきりそれを引き抜いた…Sは、体が軽くなったのか、そのまま倒れた。

「…………楽になった。」/彼はそう言った。/そうだ、私がブツ飛びそうになった時も、彼が私の体内にいた者を引き取ってくれたのだ。/そういうことが…………出来るのか…………

この後、いつしか「白い球体」は「ちゃんと、動物の形をしている」ようにビジョンが変化し、さらに彼女の意思に従うような存在になっていく。Sの上に覆い被さっていた「豹」(ジャガーのことか)を呼び寄せ——

「…………ごめんなあ…………」/そう言って私は、手を合わせていた。/私の意志ではなかった。/両手が、ピタリとくつつき離れなくなったのだ。/そしてそれが離れたと思った瞬間、パンッと大きな音を立て、手を叩いた。/すうっと、豹が消えた。/地面に吸い込まれていくように、どんどん透き通り、消えていった。

…………シャーマンたちは沈黙し、じっと、こちらを眺めているようだった。/たまに小さなライトを取り出し、私を照らして見たりしていた。

<http://ameblo.jp/world-hoppin/entry-10832355198.html>

この後も小さな動物たちをめぐるきわめて印象的な場面が続いていく。ぜひ、ご本人のブログを一読していただきたい。何の準備もなく、わずか二晩でこのような経験をしていることに驚く他はない。心理学化された「無意識への旅」ではなく、いかにもシャーマニクな「異なる現実への旅」。ネオ・シャーマニズムなりニューエイジ周辺で使われる「パワーアニマル」なり「スピリット・ガイド」なり、あるいはスタンダードな「使い霊」なり、手垢のついた用語はいっさい使われていない。それでいて/だからこそ圧倒的な迫力でシャーマニズムの始原的風景ともいえる世界が描かれている。聡明で強い人なのだろう、途中からはシャーマンたちも手に負えない、もてあまして様子すらみとれるが、そういう危機的状况と一緒に参加した旅行者と協力しあいながら、自力で乗り越えている。しかも最終的にはコントロールでき

る次元にまで到達している。このレベルではレディ・メイドの身体観、自然観の違いを指摘してもしょうがない。まさにこのような経験がもとになって新たな身体観、自然観がつくられていくのだから。

繰り返しになるが、シャーマンとは多種多様な超自然的存在との交流から各種の力や知識を受け取っていく存在である。もちろん「超自然的存在との交流」といっても、それは当人の主観的/主体的 (subjective) な経験としての話だし、であればこそ同時にその経験に対する周囲の人々からの広範な支持、言いかえれば社会的・文化的な承認を得ることがどうしても必要になってくる。その承認があらかじめ封じられている (まさに身体観、自然観が異なる) 世界の住人である彼女はシャーマンではないし、本人もそのつもりはない。ただ「動物たちを・・・世界を見る目が、変わり、生も死も「どちらもそれなりに痛くて、/そして、尊い」ことを切実に受け止める深い洞察を最後に語っているだけだ。

### 【アヤワスカ儀礼を考える—時間的に】

少しばかり特定の参加者の経験にこだわりすぎたかもしれない。しかも相当に例外的な経験でもある。ただ、圧倒的な文化差をこえて、こんな風に「つながりうる」ことは示しておきたかった。文化的背景の相違にこだわるあまり、他者とつながる可能性を閉ざしてしまっただけにもならない。その意を汲んでいただければ幸いである<sup>14)</sup>。

さて、私たちはこういった現実をどのように考えたらいいのだろうか。もちろん、論点はいくらでもみいだせる。ここまで紹介してきたのはスイピーノなどサンフランシスコ村の様子と旅行者たちのアヤワスカ経験の一部にすぎない。その旅行者たちが引き寄せられる理由はどういうものなのか、そしてこうした儀礼の経験をどう人生に生かしているのか。また受け入れ側のシャーマンや現地の人々は旅行者の流入や儀礼への参加をどのように受け止めているのか。儀礼の観光化、商品化は自分たちにとってピンチなのかチャンスなのか、その両方か。さらには儀礼への参加に加えて、日本人がシャーマンに弟子入りしているような現実をどう捉えたらいいのか。異文化に対する敬意の表明、オマージュとみるべきか、クリエイティブ・コモンズのような人類共通のスピリチュアル資源へのアクセスとみるべきか、あるいは先住民文化の収奪として批判の対象にするべきか。そもそも、こうした異文化のスピリチュアルな伝統への関心は現代社会との関係でどう位置づけられるのか。

パラフレーズしてみたい論点はたくさんある。ただ、残念ながらプカルパに滞在できたのは10日前後でしかない。オリジナルのデータをもとに実態に即して語るのは今後の課題とし、ここではプカルパやイキトスに見られるような現実を評価する際、前提として押さえておくべきことを大枠として提示するにとどめておきたいと思う。

\*                     \*                     \*

まず、私たちが確認しておくべきなのは、アヤワスカ儀礼にも歴史——時間的経過の中で生じた差異の蓄積——があるということである。確かに、アマゾン上流域の先住民社会においてアヤワスカは太古の昔から使われてきた。その意味ではアヤワスカ儀礼を軸とするシャーマニズムは先住民の伝統文化そのものである。だからこそ旅行者たちはエキゾチックな魅力を感

じるわけだし、その旅行者たち自身の関与によって伝統がそこなわれることを危惧する人たちもいる。これまで森の奥で守られてきた先住民固有の宗教実践が21世紀のグローバル化の波に洗われ、危機にさらされているというわけだ。しかし、その伝統なるものは決して固定されたものではない。アマゾンの歴史を少し振り返ればすぐに了解できることだが、先住民たちの動きは漠然とイメージされているよりも遙かにダイナミックなものである。

たとえばアンデス高地とアマゾン低地との交易関係はコロンブス以前に遡ることが判明しているし、現在のアマゾン先住民の民族分布にしてもコロンブス当時のそれとはまったく様相を異にしている。スペインの征服期には混乱状態のアンデスから多くの先住民がアマゾン側に流入し、それによりアマゾン先住民も玉突き状にさらなる奥地に拡散していった。植民地時代にはミッションによるなかば強制的な移住も行われ、19世紀半ばから20世紀初頭にかけてのゴムブームの際には奴隷狩りのようなことまで行われている。スペインの前にはインカによる侵略の試みもあり、アマゾン先住民にとってはまさに「苦難の行進」の連続である。消えていった民族集団も数知れない。しかし、その一方では自発的、強制的な移動をくりかえす中で先住民の文化要素は互いに混ざり合い、征服者側の要素も織り込みながらシャッフリングされていく。当然ながら様々な試行錯誤も行われ、その中から新たな「先住民文化」も次々に生まれてくる(山本,2006, Taylor,1999)。その動的なプロセスの中にシャーマニズムに関する事柄が含まれていないわけがない。実際、ゴムブーム以前よりシャーマニズムに関する知識の交換は存在し、そのような文化交流/衝突の中からシャーマンの役割の中心が治療に「標準化」されていったことが推定されている(Chaumeil,1999, Fotiou,2010:165-166)<sup>15)</sup>。

もう少しミクロなレベルでも、プカルパやイキトス周辺で旅行者がアヤワスカ儀礼に参加しはじめたのは20年ほど前のことで、観光化が一気に拡大したのは21世紀に入ってからである。しかし、とくにイキトスでは、旅行者がやってくる以前、すでに1960年代末には先住民のアヤワスカ儀礼はメスティソ(混血)により広く借用、実践されており(Dobkin de Rios,1973)、市街地ではメスティソのシャーマンの方が主流であった<sup>16)</sup>。つまり、観光という近年の現象とは無関係に、先住民のシャーマニズム、アヤワスカ儀礼は先住民固有のものではなくっていったということである。

私たちと同様、アマゾンに暮らす人々もまた外部世界との接触を重ねながら21世紀の初頭を迎えている。誰もが認めるように、アヤワスカ儀礼は長年にわたって継承されてきた伝統文化である。しかし、いってみればその「伝統文化」というファイルは常に「上書き更新」されつづけてきたのであり、近年の観光化は新たな「上書き」ということに他ならない。「伝統がそこなわれる」とはいつでも、上書き/変化の存在自体を問題化してもしかたがない。それがどのような上書き/変化なのか、問題はそこにしかないはずだ。

### 【観光化と商品化】

もちろん、観光化、商品化にともなう問題がないわけではない。アヤワスカ儀礼の人气が高まるにつれ、つまり需要の拡大にともなって供給側たるシャーマンの数は増加していく。当然いかがわしい人間も入り込んでこよう。修行期間の短い未熟なシャーマンは珍しくないし、食

事制限や薬物の禁忌に関する知識が乏しかったり、参加者にアヤワスカを与えた後はイカロも歌わず場を立ち去るなど、詐欺師に近い無責任なシャーマンもいるようだ。イキトスでは夜中に森の中でひとり残された女性旅行者とか、物理的およびサイキック (psychic) なレベルでの性的ハラスメントも報告されており (Fotiou:210-215)、地元メディアには犯罪的な事例が紹介されてもいる (<http://diariolaregion.com/web/2010/03/11/turista-alemana-clama-ayuda-y-justicia/>)。

仮にシャーマンの質が確保されたとしても、シャーマニズムが商品化され、需要と供給の関係で儀礼の価格が設定されると、経済力のない地元の人々は「消費者」として認知されない可能性もでてくる。ことにプカルパより旅行者の集まるイキトスでは、儀礼への参加が順番待ちの状態、ウェイティング・リストまである人気シャーマンも存在するという (Fotiou,2010:306)。中には欧米のクライアントから招待され、ニューヨークやバンクーバー、アムステルダムやウィーンといった世界の主要都市で出張儀礼を行うなど、グローバルなビジネスに発展している場合すらあるようだ (Dobkin de Rios and Rumrill,2008:90)。地元では自らの才能と専門知識を強調するウェブページを開設し、パンフレットを作成、エコツアーを扱う旅行代理店も設立する (op.cit.:76)。ニューエイジ系の欧米人とのつきあいから、いつしかインド風のチャクラ・セラピーやシベリア風のシャーマニック太鼓、さらに呼吸エクササイズといったものまで取り入れる (op.cit.:76, 90)。

いささか極端な事例ではあろうが、ここまでくれば先住民であれメスティソであれ、地元の人々が入り込む余地はないように思える (地元の人々も、こんなシャーマンに世話になる気はないのかもしれない)。当然のごとく、古い世代のシャーマンは嘆きの声をあげ、そういったシャーマンと長くつきあってきた人類学者も批判を繰り返している (op.cit,2008, Dobkin de Rios,2009)。サンフランシスコ村ではそこまで先鋭化した様子はいかががえなかったが、遅かれ速かれ、似たような状況になっていくのかもしれない。私もまた複雑な気分である。

ただ、スペインの征服以降これまで一方的に収奪されてきたアマゾン先住民の歴史を想えば、現在の観光ブームは理不尽に周縁化されてきた人々にとって起死回生、さらには千載一遇のチャンスにもみえてくる。手持ちの文化が外国人に評価されることで自文化に対する誇りを取り戻すことだってあるだろう。旅行者の側にしても、何が起こるのか正確な予測は難しいとはいえ、儀礼に参加した者の多くはそれなりの満足を得てもいる<sup>17)</sup>。考えてみれば「アヤワスカ

### 〈写真3 ヤリナコーチャ湖畔の一角〉



カ儀礼への参加費37ドル」という金額は、この儀礼の稀少性と (豊かな〈北〉の国々からやってきた) 外国人バックパッカーの経済力とが均衡する、絶妙な落としどころのようにも見える。その意味で、旅行者とシャーマンの取引は一種の「フェア・トレード」といえるのかもしれない。

外国人旅行者を集めたアヤワスカ儀礼の観光化、その隆盛ぶりは「グローバル資本主義の流入」という意味ではかつてのゴムブーム

と共通する面をもつ。しかし、今回の「上書き」の方がはるかに穏健なものであることも確かだ。(必要なのは「規制」なのか「市場による淘汰」なのかはともあれ) シャーマンの質が確保され、経済資源の再配分により観光が「村おこし」につながっていくような展開にでもなれば、グローバル化の時代にふさわしい立派な「伝統文化」になっていく可能性もあるように思う。

### 【アヤワスカ儀礼を考える－空間的に】

もちろん、参加者の多くが外国からの旅行者である以上、観光化されたアヤワスカ儀礼の動向は現地関係者の努力だけでは届かない領域がある。たとえばアヤワスカの使用はペルーでは合法だし、2008年にはペルー文化局 (Instituto Nacional de Cultura) により「アマゾン先住民のコミュニティで実践されているアヤワスカの伝統的な使用とその知識」は国家の「文化遺産」(Patrimonio Cultural de la nación) に指定されている (<http://www.dejaquesuceda.org/index.php/articulos/ayahuasca-p-cultural>)。しかしその一方、アヤワスカは国際条約 (Convention on Psychotropic Substances, 1971) で所持・使用が禁止されているDMT (Dimethyltryptamine) を含有する「薬物」でもある。この条約でも先住民の伝統的な儀礼での使用は許容されているとはいえ、アマゾンの外では当然のごとく議論の対象になってくる。

イキトスの一部シャーマンによる欧米での出張儀礼の存在については紹介したが、欧米で最初に物議をかもししたのは、アヤワスカ儀礼を独自の宗教実践にとりこんだサント・ダイミ (Santo Daime) やユニオン・ド・ベジエタル (União do Vegetal) といったブラジルの教団である。いずれも創立者はゴム採取人であり、アマゾン奥地で働いていた時期に (イキトスやプカルバのメスティソと同様) 先住民のアヤワスカ儀礼にふれたのが教団設立のきっかけである。サント・ダイミは1930年代よりアクレ州で、ユニオン・ド・ベジエタルは1961年に Rondônia 州で活動を開始し、両教団とも1970年代にはサンパウロなどの都市部に、そして90年代には欧米にも進出するという経緯をたどっている (中牧, 1992, Tupper, 2002)。1980年代にはブラジル国内でも問題視され、両教団のアヤワスカ使用が禁止されていた時期もあった。しかし1987年には真摯な宗教的实践だと認められ、それ以降アヤワスカの使用は (先住民でなくても) 合法化されている。欧米で騒動が起こったのはその後、1999年である。この年の5月、アメリカ合衆国のニューメキシコ税関でマナウスから送られたユニオン・ド・ベジエタル支部宛のアヤワスカ30キロが没収され、さらにサンタフェでも支部リーダーが逮捕されるという事件が発生した。さらに同年10月にはオランダのアムステルダムで行われていたサント・ダイミのアヤワスカ儀礼に警察が踏み込み、ここでも支部のリーダーたちが逮捕されている (Dobkin de Rios and Rumrill, 2008:121, Tupper, 2009b)。

ただ、意外にというべきか、オランダの件はEU人権法にもとづく異議申し立てにより、リーダーたちは迅速に解放されている。アヤワスカに関して精力的な発言を続けているタッパーによれば、この一件がヨーロッパにおける一種の試金石となり、スペインなどでも似たようなプロセスを経て国内でのアヤワスカ使用が承認されたようだ (Tupper, 2002:500-501)。アメリカ合衆国の事件にしても、時間はかかったものの2006年には「信教の自由は薬物関係の法規にまさる」との最高裁判決が下り、ここでも最終的にはアヤワスカの儀礼的な使用は認められてい

る (Dobkin de Rios and Rumrill,2008:121-127)<sup>18)</sup>。

現時点での欧米の対応としては、薬物規制の考え方と宗教的自由、あるいはナショナルな規範と文化多元主義 (cultural pluralism) や多文化主義 (multiculturalism) といった理念との葛藤に悩みつつ、どちらかというと後者が選択される場合が多いという印象である (Tupper,2009a)。時代的な風潮としても、このところ土地の所有権や自治権、さらに知的所有権などに関して先住民の政治的主張が世界中で認められる傾向にあり、彼ら/彼女らの言語表現や音楽、世界観が尊重されるようになってきている。そういった風を受けてのことでもあろう。また幻覚剤一般に対する態度も欧米では微妙に変化しつつある。そのあたりの事情も関係しているのかもしれない。

よく知られているように、カウンターカルチャーでの使用に対する反発から、幻覚剤については管理された科学研究すら1970年代から20年ほどは許可されていなかった。ところが90年代から徐々に心理学、セラピー関係で限定的とはいえ実験的利用が許可されるようになり、しかも、そうした心理学系の研究では、儀礼的、実験的なコンテキストならDMTやシロサイピンといった幻覚剤は心身に無視できないセラピー効果をもたらすという結果がでてきているのである (Barbosa et al.,2005, Barbosa et al.,2009, Dobkin de Rios et al.,2005, Riba et al.,2005)。実際、すでにペルーのタラポトには1992年より「タキワシ」(Takiwasi) という薬物依存者向けの施設が設立されており、コカインやアヘン系薬物、アルコール、タバコなどの依存に対するリハビリとしてアヤワスカ儀礼が導入されている。アヤワスカの摂取前にはミサを行い、代表者のフランス人医師ジャック・マビ自身がキリスト教の聖人に呼びかけるイカロを歌う。アマゾンの伝統的医療と現代の心理学的アプローチを接合させる試みであり、流用されたアヤワスカ儀礼はもくろみどおりサイコセラピーの効果を顕著に促進させているという (Kjellgren et. al,2009, Dobkin de Rios and Rumrill,2008:278-279)<sup>19)</sup>。

このような動きと欧米当局の判断は互いにフィードバックする関係にあるし、またこうした欧米を中心とした世界の動き全体が、プカルパやイキトスの状況をつくりあげるコンテキスト(のひとつ)になっていく。もちろん、その「世界の動き」にしても一様ではないし流動的でもある。現在でもフランスでは(イスラム女性のブルカと同様)宗教的な使用であってもアヤワスカは禁止の扱いを受けているし、アメリカ合衆国ではインターネットを介してアヤワスカ類似物質を入手し、儀礼的なコンテキストとは無関係に娯楽目的で摂取した若者の深刻な事故も報告されている (Brush et al.,2004, Sklerov et al.,2005)。大きな犯罪とリンクするようなことでも起これば、風向きが一気に変わることもあるだろう。わが日本にしても、少なくとも公的機関やマス・メディアのレベルでは、儀礼であれ何であれ、変性意識にふれる行為自体が危ないこと、極端に言えば「個人の病理」(病気/異常)、もしくは「社会の病理」(犯罪/悪)として扱われがちである。先に紹介した葛藤を通過しつつある欧米からすると——日本人旅行者のありようとはまた別の意味あい——相当にナイーブな段階に感じられるのかもしれない。マテオ氏の自宅前に示されていたスペイン語、英語、そして日本語。それぞれの言語を母語とする旅行者たちの帰属先も一枚岩ではない。

\* \* \*

歴史を遡ってもそうだったように、これからも当分はアマゾンの地に平安が訪れることはなさそうにみえる。プカルパやイキトスの状況にせよ、世界の動きにせよ、あるいは両者の関係にせよ、これからどうなっていくのか、展開はよみがたい。儀礼の現場に視点をフォーカスするにせよ、視線を上げて背景を考えていくにせよ、なかなか複雑である。それだけに色々な方向に思考をめぐらせ、イメージをふくらませる契機にもなる。私にとってペルー・アマゾンのアヤワスカ儀礼はそのようなものであった。今後どのような「上書き」がなされていくのか、これからも時間をかけて見ていきたいものである。

---

**【註】**

- 1) たとえば2010年、2011年におけるペルー経済の実質成長率はそれぞれ8.79%、6.25%である ([http://ecodb.net/country/PE/imf\\_growth.html](http://ecodb.net/country/PE/imf_growth.html))。1980年代末から90年代初頭の混乱期には前年比マイナスが当たり前であった。当時を知る者としては信じられない思いである。
- 2) アヤワスカを飲用する際の器に関する考古学的研究からすると、少なくとも現在のエクアドル、ペルー領にあたるパスタサ川流域では、アヤワスカの使用は紀元前2千年にさかのぼるといふ (Naranjo,1983,1986)。

なお、この蔓と葉という二種類の組み合わせには明確な薬理学的根拠が存在する。蔓植物アヤワスカにはharmaline, harmine, D-tetrahydroharmineといった活性アルカロイドが含まれるが、混合液アヤワスカのもたらす強力な精神活性作用はむしろチャクルーナの葉に含まれるDMT (dimethyltryptamine) に帰せられる。ただし、このDMTは単独で経口摂取しても効果がほとんど現れない。消化器系の代謝によってすぐに分解されてしまうからだ。ところが蔓植物に含まれるharmineやharmalineといった「モノアミン酸化酵素抑制剤」と一緒に摂取すると、消化器系で代謝されることなく血液循環に入り、血液脳関門を突破して脳内に入り込むことができる (Trichter,2009, Tupper,2009b)。つまり、蔓もしくは葉だけの摂取ではたいした効果は期待できず、両者が組み合わせられてはじめて幻覚剤としての相貌を現すのである。どこの先住民が発見したのか、個人名はもちろん民族名称もわからない状況だが、この民俗薬理学的洗練には舌を巻くしかない。

またこの種の物質を総称する際の表記についても補足しておきたい。先住民文化によりそった「聖なる植物/液体」といったものほともあれ、薬理学、精神医学などで使用される「幻覚剤」(hallucinogen)は錯覚、実在ではない知覚という意味でのhallucinationが連想されるとして批判され、カウンターカルチャー由来の「サイケデリックス」(psychedelics)は時代の手垢がつきすぎだと言われる。近年、英語やスペイン語圏では「エンセオゲン」(entheogen/enteógeno 内なる神の意)という表現が浸透してきたが、日本語表記として定着しているとは言いがたい。人類学ではM.ウインケルマンの「精神統合剤」(psychointegrator)という用語があるものの、定着度は「エンセオゲン」以下である。

この文章では「幻覚剤」(hallucinogen)という表記を採用したが、それはアカデミズムの慣用にならうというよりも、hallucinogenの語源にあたるラテン語の'alucinare'が'wander in one's mind' (心の逍遙、精神の放浪)の意だということを意識してのことである (Metzner,1998)。

- 3) この文章では「シャーマン」の表記で統一するが、現地ではChamán (スペイン語) やShaman (英語) よりもCurandero (治療師) やAyahuasquero (アヤワスカ使い)、Brujo (呪術師) といった呼称の方が一般的である。「シャーマン」(Chamán/Shaman) という表現を使うのは主として旅行者の側である。
- 4) プールつきのホテルなど嫌悪の対象でしかなかったであろうカウンターカルチャーの担い手たちにし

ても、そのほとんどは豊かな〈北〉の若者たちに限定されていた。その意味では、かつてヒッピーの聖地といわれたインドのゴアや、ネパールのカトマンズといった空間とスイピーノとは、それほど隔たったものではないのかもしれない。

- 5) 私が参加したアヤワスカ儀礼では、(蔓植物の)アヤワスカとチャクルーナの他、sharamachun (学名不明)、「松の実にバジル」(ジェノベーゼ?)が入っていた。飲みやすくするための工夫であろう(本文中で紹介したマテオ氏やロヘル氏とはまた別のシャーマンによる調合である)。なお、チャクルーナとキントラノオ科の*Diplopterys cabrerana*が入れ替わる場合もある。
- 6) アマゾンの先住民社会では、アヤワスカは寄生虫を体内から駆除する「虫下しの薬」としても機能してきた事情がある。身体的にも確かな浄化作用があるわけだ。一石二鳥である。
- 7) ここでいう「眩暈の時」とは(先の「特殊意識状態」と同様)、人類学や心理学でいう「変性意識状態」のことである(Altered States of Consciousness, 通常ASCと略記される)。その一般的な特徴としてあげられるのは、思考や感情表現、身体イメージ、知覚、時間感覚の変化、自己コントロールの喪失、意味や意義の領域における変化、被暗示性の昂進などである(Ludwig,1972)。ASCは幻覚剤など使わなくても瞑想なり断食なりパーカッション演奏なり様々な方法で導入できるし、圧倒的な自然や芸術作品に接した時、身近な人の生死に関わる局面に直面した際など、自然発生的にも生じる。その点では人間の経験として特別なものではない。抽象度を上げて解釈するなら、こういった状態は「日常生活における現実感覚の放棄」につながり、それは同時に「別の現実の創造に向かう条件」だと位置づけることもできる(齊藤,1991:69)。

なお、その「眩暈の時」と題した拙稿(1998)では、私自身のアヤワスカ体験を軸にASC一般の可能性と危険性を「意味の喪失」という観点から論じている。あわせて参照していただければ幸いである。

- 8) 'ayahuasca experience'をキーワードにグーグル検索してみると、そのヒット数は118万件にのぼった。日本語の「アヤワスカ体験」のヒット数は26,900件である(2012年1月25日アクセス。なお「体験」を「経験」に差し替えても結果は同一)。
- 9) 参考のために紹介しておく、サンプル数は54(内5人は儀礼には参加しないコントロールグループ)と少ないが、アヤワスカ未経験者で精神的に問題のない欧米人(平均年齢33)を対象に、儀礼の24~72時間前、儀礼後1週間以内、1ヶ月後、3ヶ月後と継続的にインタビューを行ったトリッチャーらの研究がある(Trichter et al.,2009)。場所はサンフランシスコとカナダのブリティッシュ・コロンビアで、ベルーから2人シャーマンを招待してアヤワスカ儀礼を行ったという。結果だけ紹介すれば、被験者が経験したのは 1) 光、幾何学模様:ほぼ60% 2) 名誉、尊敬、感謝および/あるいは畏怖の念:約55% 3) つながりの感覚:50%以上 4) 自己内省および/あるいは人生に対する洞察:約50% 5) スピリチュアルな(聖なるもの、高次の力、神に関する)経験:半分近く 6) 超自然的な経験(不可視の存在になって時空を移動する、魂的存在、スピリット・ガイド、スピリット・アニマルと交流する):40%以上 7) 安心および/あるいは落ち着き:約40% 8) ヒーリング(個人的、グローバルなレベルで):約40% 9) (臨)死体験:約10% 10) 絶望、トラウマを再経験、悪魔的な空間の経験:約10%とされている。

結論としては「アヤワスカをはじめて使用した者は肯定的でスピリチュアルな経験をする傾向があり」、しかもそれは儀礼の間だけではなく「その経験を日常生活に統合していく傾向がある」。「そういった経験の後、より共感的になり、他者や自然、神あるいは聖なる存在に対してよりつながりを感じる傾向がある」、「彼らは一貫して次のことを示している。短期間のうちに癒やされたと感じ、感謝にあふれ平和を愛し、自らや他者、世界に対して責任感がより増大し、折り合いをつけられるようになっている」とのことだ(op. cit.:133)。

- 10) カネロス・キチュアの治療儀礼全般については、山本(2002)を参照されたい。

- 11) 1858年以来、ローマ・カトリック教会により正式に承認された「ルルドの奇跡」は67例にのぼる（67例目は2005年に承認されている。www.lourdes-france.org）。ところが、というべきか、ロードによれば、その中には（1990年段階の指摘なので、2005年の事例は対象外だが）周辺住民の事例はまったく含まれていないという（ロード,1990:280）。

このあたりの問題について、山本(2002)では「他者性にもとづく象徴的效果」と名づけて論じている。もちろん他者性という概念では届かない領域があるのは確かだが、参照していただければ幸いである。

- 12) 多くの言語において「息」や「呼吸」と霊的な存在が同じ語彙で示されたり、語源が共通であったりする現象がみられる。よく指摘されるように「息、霊、心、魂、精霊」などを意味する英語のspiritは「風、空気」を意味するラテン語のspiritusが語源だし、もちろんフランス語のesprit、スペイン語のespírituも同系統の語彙である。また日本語でも「息」を上下に分割すれば「自分」の「心」になる。エクアドルのカネロス・キチュアの場合、吹き込まれるのは「サマイ」(samai)であり、それは「息」であると同時に「力」を意味し、さらに「精霊」(supai)の一種でもあるとされていた。
- 13) アマゾンの文脈ではシャーマンと集落の村人が一緒に治療歌を歌ったり、複数の歌がポリフォニックに同時進行するとか（ペルーのCashinahua）、それがしだいにひとつの歌に統合されていったりする（ブラジルのKulina/Culina）ことはあるようだが（木村,1997:206）、当然ながら旅行者のこういう反応は想定されていないだろう。
- 14) かつて「よみがえるシャーマニズム」という拙稿（1997）において、文化の違いを強調するよりも「かすかに残っている他者との『つながり』」に着目してはどうか、というスタンスでネオ・シャーマニズムを論じたことがある。あわせて参照していただければ幸いである。
- 15) ある種の参照枠として何度か言及したエクアドル・アマゾンのカネロス・キチュアのシャーマニズムにしても同じことである。そもそも、カネロス・キチュア自身、多様な民族集団が融合してできあがった「先住民」であり、その誕生は多種多様な先住民がミッション活動と連携したスペイン植民地体制に組み込まれていく中でのことであった（山本,2006）。

さらに付け加えるなら、アヤワスカを軸とした治療儀礼は、元来この300年くらい人口密集地、つまり植民地支配にともなう個人レベル、社会レベル双方の「病理」がより顕在化する都市部で発展してきたもので、それが森の奥に浸透していったのではないかという説すら存在する（Gow,1994, Fotiou,2010:13-14）。

- 16) もとより先住民とメスティソの違いは曖昧である。意味上メスティソとは「スペイン人と先住民との混血」だが、コロンブス以降500年以上にわたる遺伝子の混淆がある。純粋に生物学的な意味あいで区別などできるわけもなく、言語や衣装、自己認識などの指標も使ってなれば場当たりの決定されるものだ。自己認識と他者認識が異なることも少なくない（スペイン語を喋るなど、メスティソ化した先住民をさす「チョロ」[cholo]という他称も存在する）。私自身、セснаでしか入れないようなエクアドル・アマゾンの奥地で、首都のキトを歩けば「スペイン系白人」で通用する（それ以外では通用しがたい）「アマゾン先住民」に会ったことすらある。おそらく現在のイキトスやプカルバ周辺では、地元の人々の間ではメスティソとして生活している人物でも、旅行者を前にした時には（アヤワスカ儀礼のコンテキストにおいて象徴的な価値のより高い）「先住民」を自称するシャーマンはたくさんいるだろうと思われる。
- 17) フォティウによれば、アヤワスカ儀礼は参加者に対して身体的、心理的、魂/霊的（spiritual）、それぞれのレベルで影響を与えており、より具体的には「精神の浄化、腕の神経（繊維）的な問題の改善、頭痛の消失（1ヶ月後に再発）、毛嚢腫（pilonidal cyst）の縮小、一般的な健康の増進、うつ状態の軽減（薬剤が不要になるレベルまで）、イキトス滞在中の心臓の薬剤摂取停止、自尊心の向上、人生に対する態度の変容、肯定的な展望、精神的やすらぎ・・・幼児期からの性的虐待に関連する諸問題

の改善」などがみられたという (Fotiou,2010:176-177)。

- 18) 情報を補足しておくとして、司法省およびその内局にあたる麻薬取締局 (DEA=Drug Enforcement Administration) はアヤワスカに含まれるDMTの違法性を主張し (アメリカ国内法の規制物質法スケジュール I に該当)、ユニオン・ド・ベジエタル側は憲法上の宗教の自由実践条項 (合衆国憲法修正第 1 条) により自分たちの実践は保護されるはずだとした (Dobkin de Rios and Rumrill,2008:121-127)。

日本からみると意外な判決に映るかもしれないが、アメリカ合衆国における先住民の宗教である American Native Church に関して、すでにスケジュール 1 で規制されているペヨーテの宗教的利用が認められてきた事実がある。その意味では想像できる判決ではあった。

- 19) ドブキン・デ・リオスによると、短期間でも治療を受けた患者の 3 分の 1 以上が治癒しており、半年から 1 年に及ぶ治療を受けた患者の成功率は 70% を誇るという (Dobkin de Rios and Rumrill,2008:107)。なお、マビ氏自身、通常の医学的なアプローチではいい結果が得られない身体的、心理的、心身相関的な病に対してシャーマニクな治療が有効であることに気がつき、自らシャーマンの指導を受け、自分でも修行を重ねた後にタキワシを開設したとのことである (op.cit,2008:102-103)。

#### 【参考資料】

Alhena Caicedo Fernández

2009 Nuevos chamanismos Nueva Era. *universitas humanística*, no.68 julio-diciembre.

Barbosa, Paulo Cesar Ribeiro; Giglio, Joel Sales; Dalgarrondo, Paulo

2005 Altered States of Consciousness and Short-Term Psychological After-Effects Induced by the First Time Ritual Use of Ayahuasca in an Urban Context in Brazil. *Journal of Psychoactive Drugs*, Vol. 37 (2).

Barbosa, Paulo Cesar Ribeiro; Cazorla, Irene Maurício; Giglio, Joel Sales; Strassman, Rick

2009 A Six-Month Prospective Evaluation of Personality Traits, Psychiatric Symptoms and Quality of Life in Ayahuasca-Naïve Subjects. *Journal of Psychoactive Drugs*, Vol. 41 (3).

Brush, D. E., Bird, S. B., & Boyer, E. W.

2004 Monoamine oxidase inhibitor poisoning resulting from Internet misinformation on illicit substances. *Journal of Toxicology: Clinical Toxicology*, 42 (2).

Chaumeil, Jean-Pierre

1999 El Otro Salvaje: Chamanismo y Alteridad. *Amazonía Peruana* 13 (26):7-30.

Dobkin de Rios, Marlene

1973 Curing with Ayahuasca in an Urban Slum. *Hallucinogens and Shamanism*. Michael Harner (ed.), Oxford University Press.

Dobkin de Rios, Marlene; Grob, Charles S.; Lopez, Enrique; da Silveira, Dartiu Xavier; Alonso, Luisa K.; Doering-Silveira, Evelyn

2005 Ayahuasca in Adolescence: Qualitative Results. *Journal of Psychoactive Drugs*, Vol. 37 (2).

Dobkin de Rios, Marlene, and Roger Rumrill

2008 *A Hallucinogenic Tea, Laced with Controversy: Ayahuasca in the Amazon and the United States*. Westport, Conn: Praeger.

Dobkin de Rios, M.

2009 *The Psychedelic Journey of Marlene Dobkin de Rios: 45 Years with Shamans, Ayahuasqueros, and Ethnobotanists*. Park Street Press.

Fotiou, E.

- 2010 From medicine men to day trippers: Shamanic tourism in Iquitos, Peru (Unpublished doctoral dissertation). University of Wisconsin, Madison, WI.
- Gow, Peter  
1994 River People: Shamanism and History in Western Amazonia. Shamanism, *History, and the State*. Nicholas Thomas and Caroline Humphrey (eds.), Ann Arbor:University of Michigan Press
- Kjellgren, Anette; Eriksson, Anders; Norlander, Torsten  
2009 Experiences of Encounters with Ayahuasca -- "the Vine of the Soul". *Journal of Psychoactive Drugs*, Vol. 41 (4).
- Ludwig, Arnold  
1972 Altered States of Consciousness *Altered States of Consciousness*. Charles Tart (ed.), Anchor Books.
- Metzner, R.  
1998 Hallucinogenic drugs and plants in psychotherapy and shamanism. *Journal of Psychoactive Drugs*, 30 (4).
- Naranjo, Plutarco  
1983 Ayahuasca: *Etnomedicina y Mitología*. Quito, Ecuador: Ediciones Libri Mundi.  
1986 El Ayahuasca en la Arqueología Ecuatoriana , *América Indígena* 46.
- Riba, Jordi; Barbanjo, Manel J..  
2005 Bringing Ayahuasca to the Clinical Research Laboratory. *Journal of Psychoactive Drugs*, Vol. 37 (2).
- Sklerov, J., Levine, B., Moore, K. A., King, T., & Fowler, D.  
2005 A fatal intoxication following the ingestion of 5-methoxy-*N,N*-dimethyltryptamine in an ayahuasca preparation. *Journal of Analytical Toxicology*, 29 (8).
- Taylor, Anne Christine  
1999 The Western Margins of Amazonia from the Early 16th to the Early 19th Century, in *The Cambridge History of the Native Peoples of the Americas* (Vol.3, Part2), ed. F. Salomon & S. B. Schwartz, Cambridge University Press.
- Trichter, S.; Klimo, Jon; Krippner, Stanley  
2009 Changes in spirituality among novice ayahuasca ceremony participants. *Journal of Psychoactive Drugs*, Vol.41 (2).
- Tupper, K.W.  
2002 Entheogens and existential intelligence: The use of plant teachers as cognitive tools. *Canadian Journal of Education*. 27 (4).  
2008 The globalization of ayahuasca: Harm reduction or benefit maximization? *International Journal of Drug Policy*. 19 (4).  
2009a Ayahuasca healing beyond the Amazon: The globalization of a traditional indigenous entheogenic practice. *Global Networks: A Journal of Transnational Affairs*, 9 (1).  
2009b Entheogenic healing: The spiritual effects and therapeutic potential of ceremonial ayahuasca use. In J. H. Ellens (ed.), *The healing power of spirituality: How faith helps humans thrive* (Vol. 3). Westport, CT: Praeger.
- AYAHUASCA:Patrimonio Cultural  
(<http://www.dejaquesueda.org/index.php/articulos/-ayahuasca-p-cultural>)  
Site Internet des Sanctuaires Notre-Dame de Lourdes ([www.lourdes-france.org](http://www.lourdes-france.org))  
Turista alemana clama ayuda y justicia, *La Región*, marzo 11, 2010  
(<http://diariolaregion.com/web/2010/03/11/turista-alemana-clama-ayuda-y-justicia/>)

- ・ 木村秀雄『水の国の歌』東京大学出版会、1997年。
- ・ 斉藤稔正「最近の変性意識状態研究の諸相」『催眠学研究』第36巻, 第2号、1991年。
- ・ 中牧弘允「はじめに液体ありき－ブラジルにおける幻覚宗教の創世記」『陶醉する文化』（中牧編）平凡社、1992年。
- ・ ポール・C. ロード『生還－死に直面した11人の記録』日本教文社、1990年。
- ・ 山本誠「よみがえるシャーマニズム」『論座』朝日新聞社、1997年。
- ・ 山本誠「眩暈の時－知覚の変容と意味の喪失」叢書「身体と文化」第1巻『技術としての身体』（野村雅一・市川雅編）大修館書店、1998年。
- ・ 山本誠「幻覚剤と治療－カネロス・キチュアの治療儀礼を手がかりに」国立民族学博物館共同研究「ドラッグ文化の諸相」研究報告『サイケデリックスと文化－臨床とフィールドから』（武井秀夫・中牧弘允編）春秋社、2002年。
- ・ 山本誠「歴史のなかのアマゾン－破壊と変容、そして生成のプロセス」『エクアドルを知るための60章』（新木秀和編著）明石書店、2006年。
- ・ 『新約聖書』日本聖書協会、1973年。
  
- ・ 「アヤワスカを求めて。プカルバPcallpa（世界一周旅行記）」  
（<http://mysoulmyheart.com/note/ayahuasuca3.html>）
- ・ 「参加者のアヤワスカ体験談」（[www5c.biglobe.ne.jp/~angel.../TSUA-Peru-Taikenk11.htm...](http://www5c.biglobe.ne.jp/~angel.../TSUA-Peru-Taikenk11.htm...)）
- ・ 「発狂（世界一周！ World hoppin' blog）」（<http://ameblo.jp/world-hoppin/entry-10832355198.html>）
- ・ 「ペルーの経済成長率の推移」（[http://ecodb.net/country/PE/imf\\_growth.html](http://ecodb.net/country/PE/imf_growth.html)）